るの必要あればなり

抑も本位の形態が單一なるを貴ふば學理上一應尤もなるとなれども更に之よりも一層重きを置く可きは價格の標準が單一なるに在り本位の形態が單一なるは甚だ便利なりと雖も價格の標準にして單一なる以上は必ずしも其形態の單一なるを要せざるなり而して列國が同盟して複本位制を採用し法律上一定の期間金銀の比價を確定せば其期間價格の標準單一なるを得可し（條約期限經過後必要あらば列國會議の決議に依り金銀の比價を變更して新に單一なる價格の標準を得るも亦容易のとなり）何ぞ必ずしも金貨論者の如く形態の單一なるに拘泥するを要せん況んや本位貨幣に最も貴重す可き所は其の價格の變動少なきにありて複本位は單本位よりも遙かに善く此條件を滿たすものなるに於てをや何が故に複本位は單本位よりも善く此條件を滿たすや曰く金銀兩金屬を併用する時は補償作用行はれて增減緩急相應補するの便利あれば價格に甚しき變動なし是れ學理上複本位を以て單本位に勝れりとなす理由の最も大なるものなり、且夫れ世界の有力なる金貨國は實際皆近時金銀比價變動の爲め非常の困難に陷いり之か救濟策として複本位論漸々勢力を得るに至り英獨二國に於てすら學者間には勿論實際家の間にも之れに贊成するもの著しく增加したる有樣なれば金の生產俄然大に增加するが如き意外の出來事あるに非れば複本位同盟の成る蓋し今後數年を出てざるべし果して然らば我邦は其時期を待て之に加盟するを可なりとす今日は唯銀貨本位制の下に在りて得らる可き利益を十分に享くるを勉めて他を顧みるに及ばず複本位同盟の成るを誘導するが如きも蓋し無用の勞たる可し況や今日の金貨國は永久金貨國たる可しと恃む可らざるを恃みて我邦も亦之と幣制を同しくせんと欲し一意專心金貨國たるの準備を爲すが如きは策の最も得たるものにあらざるに於てをや

夫れ然矣我邦は當分の間先つ現制を維持し國際複本位同盟の成るを待ち時期を觀て加入するを以て得策と爲す然りと雖も一般經濟社會の紛亂を惹き起すとなくして漸次金の準備を今日よりも一層增加するは頗る望ましきとなり何となれば是れ。第一に複本位制の實行にも必要なればなり。第二に意外の出來事の爲め歐米の金貨國が今日の本位制度を永遠に維持し之と同時に經濟社會の事情大に今日と其趣を異にし我邦は銀貨本位制の爲め却て困難するが如きと起り時勢の必要上遂に止むを得す金貨本位制を採らさるを得さるの場合に際せば無論必要なればなり。」

金の準備を今日よりも一層に增加するの望ましきと夫れ斯くの如しと雖も清國より取受る可き償金を悉皆金にて定め之れを金準備に費すか如きは頗る無益のとたるのみならず銀貨國たる清國に對しては無理難題たるを免れずして稍々實際に迂なるの處置と謂はざるべからず（此篇は日清媾和條約の發表前に起草する所なり讀者乞ふ其心して之れを讀め）夫れ戰後償金の用途は頗る多端にして金準備の爲め之れを用ふるか如き餘裕は實際毫も之なかるべし我邦は戰後先づ第一に軍備の擴張を爲さゞる可らず余固より戰を好むものに非ずと雖も東洋永遠の平和を得んと欲せば之れが最良の擔保として海陸の軍備を擴張せざるべからず何となれば兵は固と必ずしも孫吳の謂へるが如く兇器に非ず文明國の軍備擴張は却て往々戰はむが爲よりも寧ろ敵をして未然に戰志を生ぜしめざらむが爲なればなり故に我邦は今後無論海軍に在ては船艦の修復新造等莫大の金額を要し陸軍に在ては砲臺の整備新領地に必要なる軍隊の編制輜重並に騎兵の大擴張等種々の設計に必要なる多額の資金を要す可し其他新領地の柘殖事業衛生工事等數へ來れば必須の事業にして而かも急を要し臨時收入に賴るべきもの殆ど枚擧に遑あらず償金が總て此等の臨時費を支辨して尙ほ餘りあるは決して望む可からざるとなり良し多少の餘りありとするも是唯其の一少部分たるに過ぎざるべし此の一少部分を金準備と爲す或は可ならん全部を擧げて之に供するが如きは是れ實に軍國の要務を知らざるものゝみ何ぞ其に戰後の經濟策を論ずるに足らん況や償金を金貨にて受取り之を以て直ちに金貨本位の制度を建てんと欲するが如きに於てをや

第四　結論

以上陳述する所に依て之を見れば今日は我現行貨幣制度を改正す可き必要を見ず他日之れを改正す可き時期到るも是れ金本位を採用す可き時に非ずして寧ろ列國が複本位同盟を結ぶに際し我邦の是に加入すべき時なりとす列國が此時運に際會するは金銀價格變動今日の如く甚しき以上は蓋し數年を出でざるべしと信ず然れども萬一尙ほ許多の歲月を要するとあらば我邦は宜しく現制を維持して時期の到來を待つべし複本位同盟成るの機運未だ熟せざるに當り我邦が如何に列國を勸誘するも列國は決して我が勸誘を容れざるべし況んや我邦は目下銀價變動の利益を享けつゝあるものなれば强て複本位を實行するの必要なきに於てをや故に我邦の今日に處す可きは唯時期の至るを待ち其間固く現制を守りて泰然動かざるに在り輕卒の擧動あるが如きは弊制に關しても我邦の今日最も愼まざるべからざる所なり。

探檢及び移住の方針

志賀重昂

所謂「探檢」

近年來、一世の口頭に顯出する所謂「探檢」とは何ぞ、何すれぞ「視察」と言はずして「探檢」と言ふ、何が故に「巡覽」と喚ばずして「探檢」と喚ぶ、所謂「探檢」とは蓋し彼の「エキスプロレーション」の事か、果して然るか、「探檢」の二字にして靈あらば、醜愧の極、穴に入らん哉。

饋餉宿泊を托する旅亭の便ある地あり、然らずとするも農家民屋の以て寬眠を貪るに足るあり、而かも數日程ならざるに早く出でゝ便宜の處に到るを得べく、美ならずと雖も食以て飢を療するに餘あり、淸冽ならずと雖も水以て瘴毒なきを得、道途假令車馬を通せずとするも、猶且つ郵遞脚夫の經過するあり、此の如き地方に行旅し、此の如き風土に徜徉し、以て事物を視察する、是れ果して所謂「探檢」なるか、其人所謂「探檢者」なるか、彼の「エキスプロレーション」とは這般容易の事を爲すの謂にあらず、「エキスプロラー」とは這般の安閑太平樂なる行業を果せし人の稱にあらず。是れ猶可なり、或は馬背を借りて行くを得べく、或に驛車に安坐して往還するに足り、甚しきは鐵車夢を載せて到り得べき地方に行旅し、此の如き風土に徜徉し、以て事物を視察する、是れしも一世は「探檢」と言ひ、其人を「探檢者」と喚ぶ。是れ未だ猶ほ可なり、其のシドニー、メルボルン、メキシコの大道直きこと髮の如く、流車金鞍滿街に縱橫し、士女手を擁して競馬牛鬪を觀、咖啡の佳香、葡萄の美酒、其の觀娛を盡すに足るの處に行くも、猶且つ「探檢」と言ひ、自からも稱し

て、「南洋探檢者」、「墨西哥探檢者」と喚び、一世も亦「探檢事業」と謂ふに至りては、眞個に言語の批評すべき限にあらず。此の如くして果して「探檢」たり、「探檢者」たり、「探檢事業」たるを得ば、巴里の春花、龍動の秋月、之れを折り之れを眺め、優遊して公子行を學ぶ者、亦以て「探檢」たり、「探檢者」たり、「探檢事業」たるを得ん、而かも眞成の探檢豈に遂に此の如きものならんや、眞成の探檢とは何ぞ。

眞成の探檢、眞成の探檢者

眞成の探檢、彼の「エスキプロレーション」とは何ぞ。夫の固より鐵道もなく、固より汽船もなく、車道なく、馬道なく、道路小徑すらあるなく、而して土地の形勢從來少しも知られず、土人は兇暴獰惡にして殺伐を嗜み動もすれば輒ち人肉を啖ひ、氣候は瘴癘にして疫疾の黴菌多く、食物なく飲水なき境に踏入し、數月若くは數年の食糧と毳幕とを携へ、深く蠻烟毒霧を冒し、未知の山海を視査して之れを人間に紹介する、之れを眞成の探檢と言ふ。此の如くして我が間宮林藏、薩哈連を經て滿州に到り、以て薩哈連と滿州とは相分離し其間に一海峽の存在することを世界に紹介せしが如き、眞成なる探檢者とは是れ。獨り林藏のみならず、夫の近藤重藏、松浦竹四郎の如き、亦た以て探檢者と稱し得べきか。彼に在りては、南亞米利加を跋涉せしフムボルトの如き、亞弗利加の中心に深進せしリヴヰンストン、パーク、スペック、スタンレイ諸人の如き、濠太利の大陸を縱絕橫絕せしモーレイ、ライカルド、ウヰル及びバークスの徒の如き、或は猛獸毒蛇の迫る所となり、或は瘴癘に冒されて疫熱に死し、或は土人の襲擊に遭ひて身を傷けられ、或は飲水食物に盡きて不毛の域に斃れ、千難萬難具さに嘗め盡したる者、是れ初めて探檢者と稱するを得。獨り此の如き未開不毛の蠻土に入りたる者のみならず、彼の乞丐に身を扮して初めて中央亞細亞の諸汗國に入りたるヴァムベレイの如き、德川幕府鎖國の嚴密なる際、髡首して日本の僧服を纏ひ行く〳〵食を路人に乞ひて長崎より江戸に到り仔細に國內の實情を視察して日本に關する大著述を成就し初めて日本の眞面目を歐洲に紹介したるケムフェルの如き、猶且つ探檢者と喚ぶに足る。然るに今や人の這般未開の方土に行旅するも、土人は基督傳道師の勸化に依りて溫柔寧和となり、食人種と稱せし者も今や既に隔世の夢となり、其の土地或は宿泊すべき一定の旅亭なくも、民舍一宿の哀を乞へば敢て之れを拒む者なく、欣々として椰子、芭蕉實を供し以て此の新來の珍客を饗するに到れり、且つや少しく便宜の地に至りては、白人は土人と交互雜處し、酒舖旗亭を設け以て旅客の便に供す。況んや往くに馬あり、還るに車あり、汽船あり、鐵路あり、大道は坦として平かに、白堊金壁樹梢の間に隱見する旅舘の如き、其の結搆の壯麗なる日本に在りては未だ看ざる所、日本の所謂「南洋探檢者」、「墨西哥探檢者」と稱せられ自からも亦爾か稱する者實に此の如き處に行くなり、而して猶且つ一世に「探檢者」として嘖々せらるる、予も亦其の中に數へらるゝ者とせば、醜慚の極の極、九地底の穴に入らんとす。

人或は言はんとす、五洲到る處此の如く交通の便あり、此の如く人文の發達するあり、文明の利器已に入らざる邊なからんとす、果して然らば、渾圓球上、今日探檢すべきの方土なからんかと。焉んぞ然らんや、亞弗利加の內部、濠太利の內部は更なり、亞細亞洲に在りては、西藏の如き、二三百年前

ジェス井ット教傳道師の始めて入り、其後西紀千八百十一年に英人の踏入せし外、一人の外人を容れず、印度駐在の英國軍隊は極めて輕快なる騎隊を編成し以て其の內地に入らんとせしも遂に驅斥せられ、中央亞細亞の探檢者露國陸軍大佐プレベリスキーの如き亦追逐せられ、最近の旅行者佛國オルレアン親王アンリー及びペンベロー氏も亦其の首都拉薩（ラッサ）に入る能はずして返る、亞細亞洲中未だ此の如きの方土も在るなり。又フヰリッピン群島の極南なるミンダナオ（ボルネオ）島の如き、白人今猶其の內部に入る能はず、面積の大は臺灣に畧ぼ倍しながら、世人に知了せらるゝは僅に沿岸の地方と內部の極小部分とに止まり、內地の大半は今日未だ判明する能はず、內地の一大湖の位置すら當代地學上の一疑問として確定せられず。其他婆寧、蘇門答剌（スマトラ）の內部、最も近くは我が新版圖なる臺灣の內部の如き、未だ文明人の入らざる所あり。此の如き處、能く踏破して險を冒し、稽查精察せし材料を文明世界に寄附する、是れを探檢者の事業となす、唯だ以上の如き多くは地學上の探檢に止まり、移住植民上の探檢に關する少きを以て、復た之れを茲に緻詳に解說せず。

移住植民的探檢の本領

移住植民地探檢の爲め人を派遣せんとするか、其人たる須らく前に載記せる如き眞成の探檢的精神を具有するにあらずんば其の資格なき者とす。在來の所謂「探檢者」や、這般の精神を具有せざるのみならず、其の放曼麤鹵なる、所謂「探檢」せし地方の各地層土壤の見本すら提齎せずして歸來し、以て漫然報告書を作爲し、朝に獻じ野に頒ち、看る者も亦輕々しく信じて多なりとするが如き、警めざるべからざる所となす。

所謂「探檢」せし地方の各地層土壤の見本を提齎せざるが如きは事の支葉に屬す、予が大言壯聲以て一世の警省を最も促さんとするは、在來の所謂「移住植民地探檢」の方針の太誤せること即ち是れ。想ふ三千年來、子々孫々斯土に生育遺傳し來りたる日本民族を苟くも他方土に移住せしめ、而して其地に數代の日本民族を生育遺傳せしめんと欲せば、須らく先づ日本民族の其地に風化（アクリマタイズ）するや否を稽查するに在り、之れか稽查に全幅の精力を洗ぐに在り、豈に淺々の事ならん哉。料るに所謂「探檢」に派遣さるゝ位の人士は、大抵社會の中流以上に在る者、故に衣食は豐足、準備用意等も亦充分に爲し得らるゝの人、加ふるに氣力も自から壯快なるの徒、而して這般の人士が自己の身躰健康を標準とし、自己の圍外物を基本とし、僅々の月日間に甲地乙土を徘徊し車行或は馬行の際に所謂「探檢」（寧ろ粗略の觀察）せし結果を以て直ちに憑據するに足るとなすは非なり、大に非なり。蓋し甲地乙土を所謂「探檢」せし結果に據り、後來之れに移住する者は、大抵其の健康、準備、所謂「探檢者」より劣下するの輩、況んや家族を挈げて移住すること植民の大要旨なれ、而かも家族中には女子もあり、老者もあり、幼年もあり、這般の者にして新移住地に棲息し能く本國同樣の健康を保維し得るや否、健康は本國同樣に保維し得とするも精神肉體共に充分に風化して發達啓育し得るや否、小兒を生產し得るや否、小兒を生產し得るも之れを充分に發達啓育せしめ得べきや否、大人小兒共に新移住地在來の風土病に感染せざるや否、風土病に感染せずとするも本國より携帶せし病患の新移住地に到りて劇進せざるや否、先づ這般の人生可住の適否を探檢稽查せずして移住と

呼號し植民と唱道す、假令其土の地味や膏腴、生產力や富饒なりとするも、畢竟結果を收納するの些小なるを豫測し得べきのみ。近年來、伊太利のマッソワ（亞弗利加、紅海海岸）に於ける殖民政署の擧らざる、獨逸の東亞弗利加開拓に失敗したる、其他歐洲列國の熱帶地方に於ける植民政署の失敗したる、其の因果全く茲に在り。是を以て「病理地學」なるもの頻りに歐土に興り、伯林の醫學社會銳意之れを研鑽し、フ[illegible]ルシュの徒盛んに此說を主張し、列國「移住植民地探檢の方針」今や全然人生可住の適否如何に一變せんとす。乃ち我が「移住植民地探檢の方針」も亦人生可住の適否如何に執り、探檢に派遣すべき者も亦所謂「探檢者」に取らず、眞成の探檢的精神を具有し而して這般人生可住の適否を稽査精察するに堪えたる人物を選擇するに在り。今や臺灣の內部は即ち探檢せざるべからず、而して其の方針、人物は斷々として茲に出でざるべからず。

予は是に到りて回想す、夫の十年前、朝鮮の植物譜を大成せんとし、韓の八道を跋涉し、風餐露宿、千艱萬難具さに冒し、被髮髦々、皮膚赭黑、復た人間の顏にあらざるに至り、遂に彼岸の奇草を採らんとして一急湍を泳ぎ此所に溺死して斯學に殉じたる故醫科大學助教授江沼源五郎氏を、此の如きの人、實に予が茲に謂ふ所の探檢に最も適する者、九泉喚び起す源五郎の魂、今の大學、復た此の如きの人やあると。

上乘の移住地

若し夫れ甲國の人民を乙土に移植せんとするか、移すべき甲國人民の勢力にして强なり盛なり、移さるべき乙土人民にして弱なり小なる處、之れを上乘の移住地となす。即ち甲國人民は乙土に移住し、乙土を開墾し、乙土の山川を拓通し、陸に鑄り、海に煮、斯くて利源を開發擴大せば、乙土人民に若干の利益を增殖させながら、而かも利益の大半は甲國移住人民に歸し其の財用と化し來る、故に乙土は地理上に於て異常の發達を來たし、其の人民は爲めに若干の利益を增殖するも、眞個の實力は移住したる甲國人民の掌握する所となり、甲は新主人となり、新甲國（甲國が日本なりと假定せば即ち新日本國）を坳建したるもの、其の甲國に利益する明然たり、是れ上乘の移住地となす所因。既に然り、日本人が上乘の移住地は、亞細亞洲にて●●●に在り、近南洋にては●●●群島、●●大島に在り、南洋にては●●●群島に在りとなす。

中乘の移住地

若し夫れ甲國の人民を乙土に移植せんとするか、移さるべき乙土にして强盛なり殷富なる處、之れを中乘の移住地となす。甲國人民にして此の如き邦土に移住せんか、其の獲る所の貨財、賃銀は力めて甲國に回送するに在り、浪費せず濫消せず、勤儉貯蓄、以て己れに資し甲國に資するに在り、而かも事茲に出でず、甲國人民にして乙土に獲る所を輙ち乙土に散じ輙ち乙土に浪費濫消せんか、其の己れに資し甲國に資する所果して若干か在る、想へ甲國人民にして乙土を開墾し、乙土の山川を拓通し、乙土の利源を開發擴大したる結果を、甲國人民にして爲めに若干の利益を得たるも、而かも此の如く開發擴大せし利源は畢竟乙土に歸し、眞個の實力は主人たる乙土人民の掌握する所となり、要するに甲は乙の爲めに其の腦力、腕力を寄附したるに過ぎず、甲國家は乙國家の爲めに這般の腦力、腕力を奪減せられたるに過ぎず。乙國家は勢力を增殖せし丈け甲國家は其れ丈け消耗せしに過ぎず。知るべし、甲國人民にして此の如き邦土に移住せば、其の獲る所の貨財、賃銀は力めて本國に回送し、浪費せず濫消せず、勤儉貯蓄、以て己れに資し甲國に資するを以て主旨と爲すべきことを。若し夫れ北米太平洋岸に在る六千の日本人が從來爲す所の行動の如き、最も則るに足らざる所とす。

日本移住民就業の根柢

今の移住を主張し若くは移住せんとする者、移住民就業の根柢を遺却す、是れ予の生平太憾とする所、何ぞや。即ち日本國固有の事業を移住地に拉し去り之れを其地に在りて擧げんとする一事を遺却する是れなり。想ふ日本人の國外（特に中乘の移住地）に事を擧げんとする、我は客地に入る者なり、生路を踏む者なり、彼國人は主地を守る者なり、熟路を步む者なり、若し夫れ客地に入り生路を踏む者にして、能く彼の主地を守り熟路を步む者と同一の事業を競爭せんとせば、我れ彼に倍するの勢力（有形無形共に）を使用せざるべからず、況んや我にして該當事業を闇知せず而して彼は之れを闇知する者とせば、我れ遂に三倍四倍の勢力を使用せざるべからざるや必然、彼は該當事業に關する觀念を其の祖先より代々遺傳する者なり、而して我は之れ有るなし、彼は該當事業を興起し且つ發達するに諸般の順便なる境遇に在る者なり、而して我は之れ有る少し、此の如くして以て我れ事業を國外に擧げんとす、假令大成するも、大成するまでに勢力を過大に使用せざるべからざるや知るべきのみ、焉んぞ如んや、日本人が日本國固有の事業を移住地に拉し去り、其の先天の遺傳性、其の闇知せる技倆を以て、之れを海外に擧げ、所謂我が長所を以て彼に當らんには。既に然り、我が長所を拉して移住地に事業を擧ぐることを爲さず、强いて我が短所を以て彼の長所と競爭せんとす、予竟に其の何の故たるを知らず、曰く地を墨西哥に購ひて咖啡を培殖せんと、何ぞ茶を培殖する事をか試みざる、曰く布哇に製糖事業を興さんと、何ぞ稻田を拓きて米穀を耕すことをか爲さゞる、曰く米國に牧畜を擧げんと、何ぞ養蠶を起さゞる、曰く濠洲に耕糖業に從はんと、何ぞ濠洲及び新西蘭の近海に充實し而して彼國人の漁獲せざる水產事業に從はざる。要するに日本國固有の事業を國外に拉し去らんか、我が爲めに二大利益あり、

一、日本人の長所を以て事業を擧ぐるものなれば、其の成功の必期なる事。

二、日本人の長所を海外に顯表し得、且つ日本の開化を四方に播種宣布し得べき事。

而して我れ獨り利益を專有するのみにあらず、彼れ亦た我が爲めに利益する所あり、

一、彼國に幽隱し彼國人の念想せざりし利源は、日本人に賴りて始めて開發擴大せられ、彼國人中因りて以て新に就業の途を發見し、直接間接の利益を增殖する事。

是れ米國濠洲の勞働社會が所謂「日本人排斥」の喊聲を大呼せんとするに先ち、亦た未前の豫防法。